

「唄と踊りの島、沖縄」

八重瀬町立東風平中学校 3年生

比嘉 木璃

『ていんさぐぬ花や 爪先に染みてい 親ぬゆしぐとうや 肝に染みり』
うちなんちゅなら一度は耳にしたことがあるこの「ていんさぐぬ花」は、県民愛唱歌で、私の大好きな琉球民謡の一つです。

私が琉球民謡を習い始めて今年で九年が経ちます。初めの頃は、唄う楽しさなど少しも分からず、親にやらされているからやっているという感覚でしかありませんでした。でも少しずつ三線が弾けるようになり、琉球舞踊が踊れるようになるにつれ、そんな気持ちは一変し、今ではステージに立ち披露できることに喜びを感じています。

時々、慰問で訪れる老人ホーム先で、三線や太鼓に合わせて最高の笑顔で手拍子をするおじいちゃんや、涙を流しながら聞いてくれるおばあちゃん達の姿は、演奏する喜び以上に得るものがたくさんあります。

また、沖縄の芸能は本土でも通用するのか、と不安とプレッシャーを感じながらの本土公演では、「自分達の地域の伝統芸能を披露する姿に涙した、感動した」という声をいただくことも多く、その度に、続けてきたことに安堵し、我が故郷の芸能の素晴らしさに、誇りと自信をもつ私でもあります。

つまり、三線や琉球舞踊は地域だけの「お遊び」ではなく、日本中いや世界の人々にも感動を与えられるほど価値のある伝統文化（芸能）であるということです。

でも、実際に伝統芸能に触れ、親しんでいる人は決して多くはありません。私のクラスを見回してもせいぜい二、三名程度です。こんなに素晴らしい唄や踊りが代々受け継がれていないのはいったいなぜでしょうか。

思うに、私たち若い世代が伝統文化や歴史を学んだり、唄や踊りを体験したりするという機会が身近にほとんどないということが問題だと思うのです。いまや自分の住んでいる地域の唄でさえ知らないというほど関心が薄くなっています。

私の通う学校ではラッキーなことに、総合学習の一環として、地域の方を講師に招き、琉球舞踊や三線、組踊りなどの伝統芸能を学び、披露するという機会が設けられています。

譜面も読めず、三線の持ち方さえ分からなかった人が、手取り足取り教えてもらいながら、わずか半年で曲が弾けるようになるのです。また、それをきっかけに、三線の研究所に通い本格的に学び始める人や、伝統芸能が学べる進学先を選択する人もいます。

つまり、上手下手は関係なく、まず触れてみる、やってみることで唄う楽しさや伝統芸能の素晴らしさを知ることができるのです。そんな機会を各学校単位、各地域単位で増やしていく、そういう地道な活動を続けることこそが、沖縄の文化や芸能の継承につながるのではないのでしょうか。

現在、沖縄には年間七百九十三万人もの観光客が訪れています。どの観光客も沖縄の温暖な気候と豊かな自然を満喫するためにこの地にやってくるでしょう。でも日本には魅力的な観光地は他にもたくさんあるのです。

そこで、「観光立県沖縄」として、「絶対行きたい県ナンバー1」にするために、うちなんちゅの大らかさと唄の島、踊りの島を全面にアピールするのはどうでしょうか。

市町村にある公共施設等を利用し、地域の人材を活かし、(地域のオジーやオバーを活用した)「三線教室」や「カチャーシー教室」等を開くのはどうでしょうか。「指笛教室」というのも案外、ユニークで人が集まるかもしれません。観光客が海や自然を満喫した後に、空いた時間に気軽にアクセスできるくらいのプランにするのです。前もって計画を立てなくても飛び込みで出来るお手軽な企画「民間受入れプラン」を増やせば、観光客増加にもつながるし、沖縄の就職率アップにもつながるかもしれません。

地元の人との触れ合いを体験することで、お稽古事で習う感覚とはひと味違うものになるはずです。私もそんな所があれば、すぐに登録して活動したいです。

うちなんちゅ独特の大らかさや人懐っこさを思いっきりアピールした『美らさんゆいまーる観光』をキャッチコピーに、おもてなしの心で観光客を迎えたいものです。

沖縄の伝統芸能が、年齢も人種も問わず、たくさんの人々に受け入れられ、楽しんでもらえる素晴らしいものだ、と、芸能に携わっている私は確信しています。

沖縄の観光を「観賞型」から「体験型」に幅を広げていけば、観光地ナンバー1になる日も遠くないはずです。

大好きな沖縄が、ますます「唄と踊りの島沖縄」として名高い観光県となるよう、私自身これからも素敵な唄をもっともっと歌い広めていきたいと思えます。